

バッハに思う

朝の通勤はラジオを聴きながら運転をしているが、ある時バッハを特集していた。バッハは1685～1750 ドイツの音楽家。彼の生きた時代は江戸時代中期。日本では雅楽や能・狂言などを大切にしながら、人形浄瑠璃から歌舞伎へと発展し、また箏曲や三味線、尺八の音が市中に響いていた。その頃ヨーロッパは巨大なパイプオルガンが教会で鳴り響きステンドグラスの虹色の輝きの中、ポリフォニーの音楽が奏でられる。宮廷ではもう既にヴァイオリン族は完成形を迎え古い形の管楽器とのコンチェルトが優雅に、市中ではオペラが上演され、人々は楽器や歌で愛を語っていた。どちらも素晴らしい音楽の形だ。

ラジオでは色々な側面からバッハの曲を紹介していたが、「教育者としてのバッハ」として、昔弾いていた曲がたくさん流れ本当に懐かしかった。とはいえ、当時バッハを弾くのは好きではなかった。多声音楽(ポリフォニー)と呼ばれ、同じ音型を持つ旋律が高音域で現れたかと思えば、追いかけるように、はたまた重なるように低い音域や中音域ではじめの音を変えて現れる。本当に唐草模様のようにメロディーが絡まっている。と思えば一緒になったり、離れたたり。本当に複雑だ。弾く方もメロディーに伴奏のような単純な形ではないので、一筋縄ではいかない。何度ピアノの先生に指摘されたことか。苦しんだ思い出ばかりがクローズアップされる。でも振り返ってみると、ピアノは弾くのが大変であっても、その音楽は嫌いではなかったのだ。

教員になってから大学の教授に誘われて『中世音楽研究会』で歌う機会を得、年1回の定期演奏会は大分の教会で合唱する。『中世の音楽』だからバッハよりももっと古い時代の教会音楽や世俗音楽を歌う。アカペラで混声合唱。ヨーロッパにあるような壮大な教会ではないが、高い天井は声を美しく響かせてくれる。歌は当然自分のパートを歌うのでポリフォニーであっても譜読みは楽だ。そして絡み合う声が美しい。教会音楽は言葉もラテン語で典礼文と呼ばれる決まった歌詞で歌われる。同じ『Kyrie(キリエ)』でもたくさんの作曲家が作曲し、それは現在でもたくさんの作曲家が(日本人も含め)作曲している。私はクリスチャンではないが、昔の人たちがこの音楽を聴いたら、天国ってすてきなところだと思っただろうな。ほぼブレインウォッシュだ。音楽の力を思い知らされる時でもある。

ちなみに、BACH(バッハ)はドイツ語で「小川」の意味。バッハって「小川」さんなんだね。(現在のIOC<国際オリンピック委員会>会長もバッハさん=小川さんだ。)ベートーヴェンは「バッハは“小川<バッハ>ではなく大海<メール>である」と言っている。後世に大きな影響を与えたバッハ。確かに「小川」ではなさそうだ。

【週行事予定】

月	日	曜	行事予定	FT	課外	備考
7	30	金	終業日 心肺蘇生法講習会 3:40- 学習相談会 15:00-	×	×	8:20 着席
	31	土				
8	15	日				
	16	月				
	17	火				
	18	水	始業式 遅刻防止強化週間 課題テスト	×	×	8:20 着席
	19	木	課題テスト(2年) 特編授業	×	×	8:20 着席
	20	金	朝課外開始(2年) 特編授業	×	○	7:25 登校
	21	土				
	22	日				
	23	月	EX前特編授業	×	○	7:25 登校
	24	火	EX前特編授業	×	○	7:25 登校
25	水	EX前特編授業	×	○	7:25 登校	